

ポルトガルスケッチ旅行雑記

s . a

スケッチ愛好仲間の気ままな旅 ポルトガル篇

期間 2007・10. 08～10・17

メンバー 石田友美、斉藤義嗣、柴原達朗、
高崎尚昭、安永耕二、芦沢勝利



ボタン、マント、ラシャ、メリヤス、ベランダ等日本語に転じた外来語、言うまでもなく元はポルトガル語です。日本人には親しみのある国でありながら、地理的に遠方のためか、また、近代化の遅れたせいか、遠い存在になってしまったポルトガルですが、近年また、その古さゆえにその良さが見なおされつつあるようです。

日本の戦国時代、南蛮の国として、交易に文化流入に華々しく活躍したことはご承知の通りです。本題に入る前に、ポルトガルの国勢、地勢について、簡単に復習しておきたいと思います。

国土の広さは日本の4分の一、九州程度、人口約1000万人で同じく九州の2倍程度、GNP（一人当たり）日本の4分の一程度です。宗教はキリスト教（カトリック）九割五分、言語はポルトガル語でブラジル（7000万人）をはじめ世界で9000万人が使っているメジャーの言語です。緯度は37度～42度で日本では仙台から函館くらいで、気候的には寒い地域に属します。しかし、現実は大西洋の海風の影響で多雨、湿潤の為、寒暖の差を締め、おだやかな気候となっています。実際我々の旅した10月中旬、日本ではやや肌寒い時期ですが、日中は汗ばむ陽気で、半袖シャツで十分でした。

人間が穏やかで人懐っこい感じで司馬氏流に言えば「スペイン的激情はポルトガルでは見られない、内気でシャイな所があるらしい」と言っていますが、あたっているような気がしました。また、男性はそうでもないですが、女性は若いうちは大変美しくスリムなのに年取ると、ほとんどの人が太ってきて、日本人から見ると異常に映る程でした。

さて、旅の話に移ります。我々は一般の観光客と異なるルート（地図参照）で行動しました。狙いは、絵になるスポットを求めて移動を続けることでした。勿論著名な場所は入っていますが、主旨は、いいスケッチポイントのある街が狙いです。旅トータル印象として、古い街並みが良く残っていて、しかも、そこに人々が生活を続けていること、また、食べ物は海産物や農産物が豊富で料理が我々の口に良く合うこと、飲み物、特にワインが大変美味しいと思いました。

2, 3 具体的な出来事を紹介してみたいとおもいます。

4号—2

ポルトガル第二の都市 ポルト にて
スペインのフラメンコに匹敵するのがポルトガルではファドでしょうか。首都リスボンに次ぐ第二の都市ポルトで夕方レストランのベレンダ風の屋外で美味しい魚料理にワインで十分な腹ごしらえをした後、10時過ぎ（終わりは12時過ぎ）からファドを聴きに皆で街に繰り出しました。不案内のことも手伝って、店に行き着くのに、行く道を訊ねつつ、急な階段を昇り、息をぜいぜいさせながらやっとたどり着いた店。間口が狭く奥行きが深い、こじんまりとした店でした、最奥には、3人ばかり店の者（その中に歌手も）店の中央辺りにステージとは言えない、小さなコーナーがあり、そこに、伴奏者と歌手が立ち、入れ替わり三人の歌手が、ファドを聴かせてくれました。我々はその歌手の真近に陣取り、飲み物（一般にはここで食事をするようです）を注文し、ファドを聴きました、までは良かったのですが、なにせ、旅の疲れと、アルコールの酔いが廻ってきて、つぎからつぎと居眠りを始めました。私などは、いの一番にうとうとしてしまい歌手にとっては、目の前の居眠りにはこたえたのではないのでしょうか。歌の内容は解りませんでした。歌声には哀調を帯びた響きがあり、海に出て行く男、陸に残る女、その辺の悲しみや祈りが込められているのでしょうか。

ポルトホテル前の広場にて



最もポルトガルらしい街 モンサントにて
ポルトの街から車で大学の街コインブラ（この国の著名な大学で、学生の黒マントは有名、世界最古の図書館がある）を經由してモンサント（聖なる山）に向かいました。

広々とした平原の中に聳える（と言っても高いものではありません）山上集落で、最もポルトガルらしい村に指定された街です。途中、ポルトガル特産のコルクの木（私は初めてコルクの木を真近に見ました、コルクは木片を加工して、板状にするものと思っていましたので、それがそのまま製品化されると聞いて驚きました）のある所で車を止め、カッターナイフで小片を取得。これが、後程私の70歳の誕生日祝いとしてデザインされプレゼントされるとは予想もしていませんでした（この時点では誰もそれは考えていなかったようですが）。

この村の最大の特徴は山全体が大小の岩で構成されていることです。気になったのは、なんで生計を立てているのだろうか、村人は老人が目立ち、観光客も少ない（後述するオビドスに比して雲泥の差）、主要都市から遠く、交通が不便なことが影響しているのでしょうか。

但し、絵を描きたい我々にとっては、大変良い環境だと思いました。うねうねとした坂道、古びた石積みの壁面とアンズ色瓦屋根の住居群や教会等、スケッチする場所には事欠きませんでした。

二日目は終日スケッチし、夜は岩のレストランで、私の古希の祝い（皆に言われるまで気がつきませんでした）を兼ねて食事会となりました。

そのとき偶然居合わせた客のギター奏者のハッピーバースデーの伴奏で会は大変盛り上がりました。私にとっては忘れられない誕生日となりました。

4号—3

城壁に囲まれた中世の街 オビドスにて

城壁の街（高さ3m 全長1.5kmのよう壁に囲まれた街、その上を一周でき、我々も一回りしました）オビドスは観光のメッカ、人口700人程の小さな街ですが、日中の賑わいはウィークデイでも大変なものでした。2階建てを中心とする狭い道を挟んで連なる民家や店舗は白い壁面にコーナーの青帯、黄帯のたて縞、それにカラフルな花が彩りを添え、街行く人々をうきうきした気分させます。城壁に囲まれたこの小さな街はどこにいても絵になり、各自、夢中でスケッチをしました。途中疲れるとサ克蘭ボ酒など買って一杯飲みながら、またスケッチに励みました。

ここのお土産はワイン、皮製品、ファド等のCD、コルク製品（皆コルクハットを購入して記念撮影）、それぞれ思い思いの品物を手に入れました。

当地の宿泊施設ですが、この国には民営ホテルの他に国営ホテル（49施設あるそうです）があり、その中で一、二を争う人気ホテルに宿泊することが出来ました。古城を質の高いホテル（部屋数は全部で9室）に改造し、一般観光客に提供している。予約が大変で我々は早い時期に予約を入れることで、一泊だけですが泊まることが出来ました。夜の食事はスーツ姿で、なんとなくしゃれたゴージャスな気分を味わうことが出来ました。

オビドスの街



そのほか、首都リスボンの街の探訪、西洋最西端のスポット、ロカ岬等お話したいことは尽きませんが、また次の機会にしたいと思います、なおこのポルトガル旅行と2年前のイタリア旅行を中心に上記メンバー6人による絵画グループ展を「すろうぶ展」と称して京橋近代美術クラブで開催いたしました。（開催期間 2007、11、25～12、01）

気の置けない6人の仲間と異国のエキゾチックな雰囲気、美味しいワインに料理、古い街を存分スケッチした という思いを深くした10日間の楽しい旅でした。

6人の仲間達

